

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金沢謙太郎

論文題目：熱帯雨林の資源利用をめぐるポリティカル・エコロジー  
ーサラワクの狩猟採集民、プナン人の生活変容からー

本論文は、サラワクの狩猟採集民プナン人とサラワク州政府とのあいだで、熱帯雨林の資源利用を巡り、長年にわたって続いている対立抗争を、ポリティカル・エコロジーの視点から分析し、あわせて、プナン人の生活変容が地域生態系に与える影響を現地調査の結果に基づいて明らかにしようとしたものである。本文は 137 頁からなり、序論のあと第 1 章から第 6 章まで 6 つの章が続き、最後に結論で締めくくられている。また、資料・文献・写真が 48 頁あり、全体で 185 頁の構成である。

序論では、「公共サービス」の提供と引き換えに熱帯雨林へのアクセス権を奪おうとする州政府の定住化政策に対して、先住民としてのプナン人が抵抗を続ける様子を概観し、紛争の全体像を把握するためには、ポリティカル・エコロジーの方法を導入し、国際関係を含むマクロ的コンテキストにおいて、資源利用を巡る紛争を動的に理解する必要があると主張する。

第 1 章「ポリティカル・エコロジー論の視角」では、上述のポリティカル・エコロジーの方法を敷衍し、本論文が依拠する分析枠組みとして、ブライアントが提示した 3 つの分析フレーム、すなわち、(1) 資源利用によって引き起こされる環境変化の全体像、(2) 資源利用を巡る紛争、(3) 環境変化がもたらす社会経済的变化、を示したうえで、戸田清の「次なる問題の発生」の指摘を受け入れて、紛争を構成するステージそれ自体が動的に変容する、という新たな分析視角を提示する。

第 2 章「狩猟採集民の生活戦略」では、森林資源の開発が始まる以前のサラワクにおけるプナン人の伝統的な生活の特色を、焼畑農耕民との対比において描いている。野生のサゴヤシから採取されるデンプンを主食とし、イノシシをはじめとする多様な魚肉類を栄養源とするプナン人は、自給を基本としつつ、農耕民との間で塩鉄と沈香などの林産物との取引を行っており、州政府との関係も良好であったことが示される。

第 3 章「政府の森林開発政策」では、熱帯雨林を木材の供給源と見なして伐採し、伐採後の土地はアブラヤシなどのプランテーションとして利用する、典型的な開発政策の流れを、サラワクの実情に即して詳述し、資源利用に由来する環境の変化を俯瞰する。

第 4 章「森林開発をめぐる非政府アクターの動向」では、日本企業を含む営利企業のサラワクでの活動、さらにはマレーシア資本による国外での森林伐採の展開、そしてプナン人を支援する国内外の NGO の動きを分析し、資源利用を巡る紛争の構図を明らかにする。

第5章「政治化された環境」では、商業伐採による環境変化によって狩猟採集生活を維持できなくなったプナン人の異議申し立てを受けて、州政府が「公共サービス」を提供するに至った事情を説明し、その結果、資源利用を巡る紛争が新しいステージにシフトしたことを明らかにする。

第6章「プナン人の生活変容とその地域生態への影響」では、狩猟採集活動を続けるプナン人が居住するバラム河流域での現地調査の結果を明らかにする。著者は調査対象地域から6つの村落を選び、各村落周辺の森林における野生可食果樹の種類が多寡を調査した。その結果、「公共サービス」が実施されている村落では、野生可食果樹の種数が相対的に少ないのに対して、「公共サービス」が実施されていない村落では野生可食果樹の種数が相対的に多いことが判明した。「公共サービス」には、医療や教育とともに、定住化を促進するための焼畑農耕の導入が含まれるが、著者は、焼畑農耕に未習熟のプナン人が焼畑を行うことにより、集落周辺の地域生態系が劣化し、生活の質も低下していると主張する。

結論では、プナン人の狩猟採集活動が地域生態系の維持に貢献してきたことを確認し、新たな段階に入った資源利用を巡る紛争が容易に解決しない理由として、プナン人に「公共サービス」を提供する政府の政策が、商業伐採の推進を前提したまま、生態系保護へのプナン人の寄与を一貫して無視していることを指摘する。

本論文は以下の2点において高く評価することができる。第1に、熱帯雨林の開発によって引き起こされたプナン人の異議申し立てが、単なる開発対自然保護という二項対立の図式に収斂するものではなく、究極的に開発と自然保護の調和を志向するものであることを、政府文書を含む多様な資料を用いて明らかにした点である。とりわけ、プナン人への聞き取り調査によって、彼らが「公共サービス」を全面的に拒否しているのではなく、定住した後も狩猟採集活動ができる程度の熱帯雨林を残すよう要求していることを明らかにした点は、資源利用をめぐる紛争に解決の糸口を見出すための方向性を示唆するものとして特に高く評価できる。

第2に、プナン人の村落と周辺地域の森林における野生可食果樹種数の実地調査は、それ自体が多大な時間と労力を費やす困難な作業であるが、著者は綿密な計画と準備のもとに調査を遂行している。この調査結果は十分に信頼できるものであり、貴重な一次資料である。

他方で、本論文にも問題がないわけではない。まず、第1章から第5章までのステージ分析と第6章のフィールドワークとの関連が必ずしも明らかになっていない。第6章では調査目的が野生可食果樹種数の解明に限定されているため、プナン人の生活実態が必ずしも明確に描かれておらず、概説的なステージ分析を具体例で補強する役割を十分に果たしていない。

また、紛争の構図の中には、サラワク州民やマレーシア国民の一般世論が含まれておらず、州や国全体のレベルでのプナン人の位置づけが必ずしも明確でない、という問題がある。

さらには、プナン人の抗議行動をモデルとしたステージ分析の枠組みが、どの程度の一般性を持つのかまだ十分に説明されていない、という問題も残る。

しかしながら、こうした課題も本論文の価値自体をけっして損なうものではない。これらの課題は著者自身もすでに自覚するところであり、今後の研究の深化によって、十分に解決することができると思われる。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。